

2019年4月1日発行（春号）

No.63

会報 いづこうげん

国指定文化財
(天然記念物)
蓮着寺のヤマモモ
樹齢推定 1,000年

目次

伊豆高原の産業の歴史	2・3
メガソーラー問題	3
会員だより	4・5
親和会地区だより	6
親和会部会報告	7
親和会情報	8

蓮着寺のヤマモモ



伊豆高原親和会

静岡県伊東市八幡野1208-95 TEL(0557) 53-1122 FAX(0557) 54-4222

伊豆高原の産業の歴史

伊豆高原にはその地形や風土に起因する独自の産業の歴史があります。今日はそういう観点から伊豆高原を見直してみよう。

築城石に使われた伊豆石

江戸城築城の際には築城に適した大きな石を大量にしかも最小限の運送費で江戸に運ぶ必要がありました。その任にあたった各藩の大名達は「伊豆石」と呼ばれる火山がもたらした堅い溶岩を見つけ出し、真鶴から伊東・東伊豆町にかけての海岸から海上輸送で大量に運び出しました。



築城石 弘火山の石丁場から切り出され、海岸に放置されている巨岩。更に二つに割ろうとしたのか楔の痕がはっきりと確認できる。

この「築城石」には碎石大名によって刻印を彫ったものがありますが、何らかの事情で今日まで放置され取り残されたままになっているものがあります。富戸港のすぐ横で県道が海に接している城ヶ崎桜の並木のあ

たりの海岸を探してみてください。ほら、波に洗われる築城石、わかりますか？

「魚見小屋」と「ボラ納屋」

ついでに富戸港の形をよく見て下さい。地形を巧く活かして程よい巾着のような形をして出入り口がすばまっています。実は漁船で囃し立てイルカをここに追い込んで捕獲する独特のイルカ追い込み漁が隣の川奈港と共に明治時代には盛んに行われました。

富戸港から灯台の方に向かうと「魚見小屋」や「ボラ納屋」がありますね。



魚見小屋 海上からだて全容が見える。今は老朽化して近づくこともできないが、伊東の「産業遺産」としての保護が望まれる。

これらは城ヶ崎海岸を回遊するボラの動きを見張り、合図を送って船を出したボラ漁の名残です。ボラと言えば富戸、富戸と言えばボラとい

う程有名だったらしく、江戸時代には武士の間で出世魚として珍重され、押送船（おしおくりぶね・オシヨクリブネ）と呼ばれて後には生魚輸送の基となる「早船」によって江戸に送られたようです。

林業と薪炭・杉板・黒朴石

供花として需要の多いシキミ（しきび）や薬草として利用された柴胡（さいこ）も江戸時代以降、伊東は有力な産地として富戸の海岸から盛んに出荷されたようです。



シマサイコ 高さ 30 ~ 50cm。8 ~ 10 月に黄色い花を咲かせる。今日でも根が生薬として利用されているが、野生のシマサイコはほとんど消滅し、現在では殆どが栽培品である。

富戸の北部に「郷戸（こうど）の浜」という海岸があり、「花生場（はなば）け」と呼ばれる水が湧き出る水場があります。出荷を待つシキミを水につけて置いておいたことに由来すると言われています。



一碧湖・水神さまのぼく石 一碧湖神社脇に湖に向かって祀られている水神（みずがみ）さまの祠。付近から産出したト石を積んで建造してある。

さて、八幡野の産物は薪炭・杉板・黒朴石です。一時代前のエネルギーは薪炭で需要地江戸に向けて山林豊かな伊豆から盛んに送り込まれました。クヌギ・ナラなどが植林され木炭の原料となりましたが、今ではその需要もなくなり伸び放題の雑木林と化して伊豆高原の景観を損ねているのも皮肉なものです。黒朴石は天城や大室山などの噴火でもたらされた溶岩のかげら・ボクイシのことで、面白い形をしたものもあって、京浜・千葉方面に出荷されて庭の築山等に使われました。各地の富士塚を作るのにも使われたようです。

池地区では毒桂（どくえ）・地元ではロクエの実（桐油の原料となるアブラ桐の実）やクロモジノキやこれを蒸留したモンジャ油も八幡野から出荷しました。

伊豆高原は

やんもの里

また、現在の浮山温泉郷はやまももの大群生地として有名ですが、その実は果物が珍しい江戸や明治・大正時代には「楊梅（ヤンモ）一升、米一升」と言われて珍重され、又その樹皮は「楊梅皮」といつて漢方・防腐剤として、あるいは「炭木」といつて漁網や衣料用染料として出荷されています。

もう、お気づきでしょう。伊豆半島東海岸に位置する伊東は相模灘を挟んで江戸に対しており、文化面・産業面で歴史的に江戸との関連性が極めて深いのです。江戸庶民や武士達の生活を支え、江戸の発展とともにこの地の人々は生活を営んできたのですね。



伊豆高原の海岸線 伊豆高原が間近に海に面しており、その海岸から江戸に向けて物資が海路搬出されたことが容易に理解できる。

伊豆高原メガソーラー建設について

昨年十一月三十日に宅造法（宅地造成等規制法）による開発許可の取消しを求めて静岡地方裁判所に提訴しました。第一回公判は三月十五日ですが、この間様々な動きがあり、状況に大きな変化が生じています。

昨年十二月、伊東市は本事業に対し条例違反として条例に基づき勧告を経て公表という最終処分を出しました。伊東市はこの処分を経産省に報告、これを受けて経産省は一月十一日、事業者に対して条例に基づく勧告に従うようにという改善命令を出しました。

伊東市の勧告は、「十二月六日まで災害防止等に必要措置を講じ、事業を中止するよう」というものでした。事業者は条例対象の事業ではないので違反はないとして勧告に従わず、二月末現在、改善命令にも従っていません。

また、工事用大型重機を搬入するために新たに橋を架けなければならぬことから八幡野川の河川占用許可を申請していましたが、二月十三日、伊東市は不許可処分を出し、



事業地内に積み上げられたトン袋

事業者は実質的に造成工事を行うことができなくなっています。

昨年夏以来、事業者は、小型重機を使って仮沈砂池の造成や事業地内の道路の造成などを行っています。これらの工事によって大量の土砂が発生し、現在は県や市の指導によってトン袋に入れ事業地内に積み上げています。雨の多い時期に入っていくと、袋が破れてこれらの大量の土が流出することが懸念され、こうした土砂による被害が生じないような防災対策が求められています。



住みたい伊豆高原 、どうやって暮らしていこう？」

伊豆高原に自動運転サービスを

親和会が二〇一六年十一月に実施した「伊豆高原に暮らしてみても」アンケート（会報五十九号）では、海山の豊かな自然環境や多様な地元産の食材に恵まれた伊豆高原で暮らし続けたいとの思いは強くても、生活する上での利便性の問題、とりわけ交通の不便さを多くの方が指摘していました。

交通利便性の問題は、日本全国で生じている問題です。少子高齢化が急速に進み、東京一極集中が解消されない中で、地方においては、人流・物流のための交通手段の確保が喫緊の課題になっています。また高齢化が進むことで運転免許の返納者も増大し、マイカーの代替となる交通手段がなければ、その地域から人が流出し、過疎化がより進行していかざるをえません。伊豆高原も同様です。免許を返納して車は使えなくなるが、代替となる交通手段がない、これでは住み易い伊豆高原にはなりません。その解決策に向けて国や自治体はいくつかの取組を進めています。今回は行政の取り組みを紹介しつつ、私たちが、ここに参画していくことで伊豆高原の利便性を向上させていく道を探っていきたいと思います。

地方での

自動運転の実証実験

少子化に伴う労働力不足の下で、恒常的に交通の足を確保するためには、自動運転による交通システムの構築は有力な解決策です。そこで国土交通省は、二〇一七年七月「中山間地域における道の駅等を拠点とした自動運転ビジネスを二〇二〇年までに社会実装することを目指して、貨客混載や観光など地域の特色を踏まえたビジネスモデルの検討を開始しています。二〇一九年一月に中間取りまとめが公表されています。



今春、観光型Maasで 伊豆が変わる

「Maas」(Mobility As A Service)とは、まだ定義づけられている言葉ではないのですが、二〇一五年のITS世界会議で設立されたMaas Allianceによれば、「Maasは、いろいろな種類の交通サービスを、需要に応じて利用できる一つの移動サービスに統合することである」としています。



これは近未来の出来事ではありません。すでに私たちの身の回りで起きていることなのです。実際、今年四月から東伊豆・下田・中伊豆で、日本で初めてとなる観光型Maasと呼ばれるサービスの実証実験が始まります。今春、JR東日本が行っている静岡デスティネーションキャンペーンに連動して、鉄道やバス、A-1(人工知能)オンデマンド乗合交通、レンタサイクルなどの交通機関をスマートフォンで検索・予約・決済でき、目的地までシームレスに移動できる二次交通統合型サービスの実証実験です。点在する伊豆エリアの観光拠点間のスムーズな移動実現による周遊促進と地域活性化が期待されています。

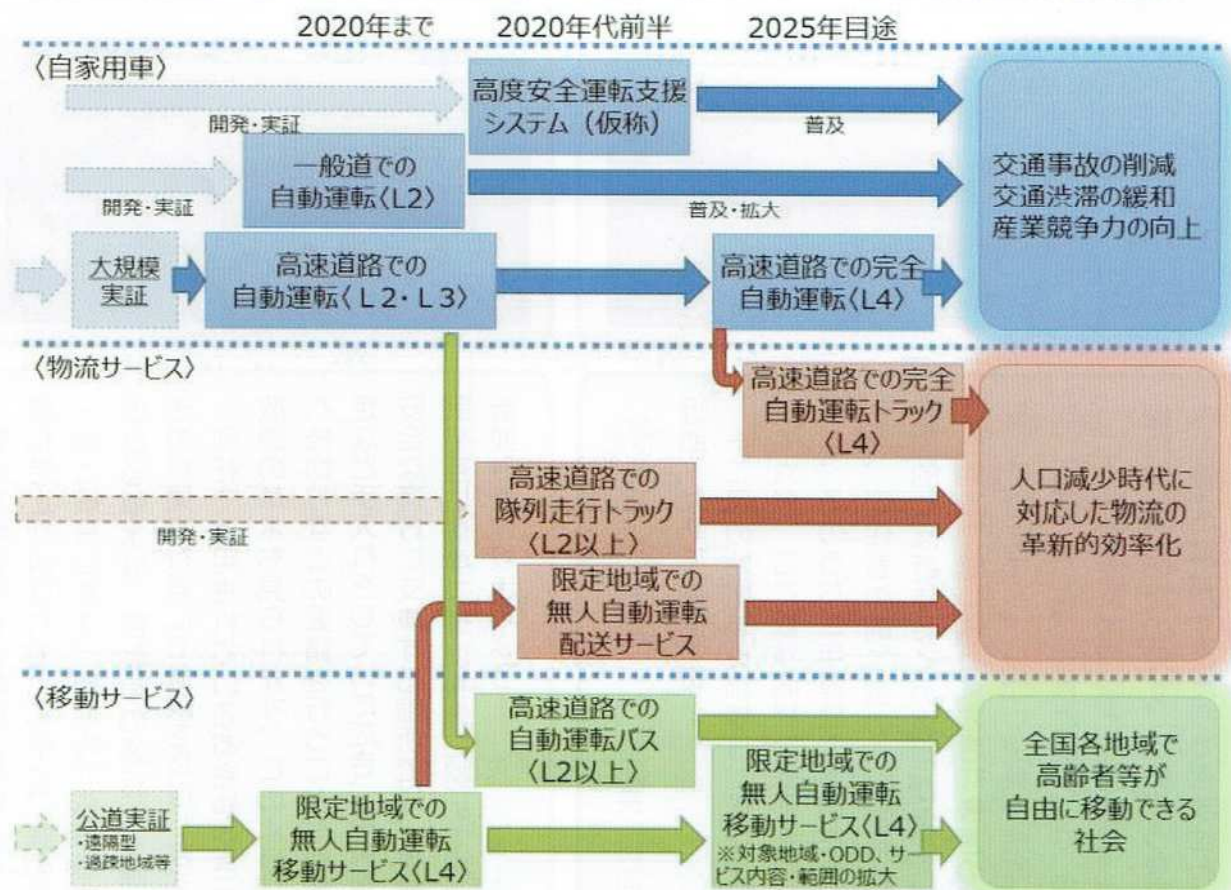
いつまでも安心して でも「車が運転できなくなった」

会員だより

ITを利用した 道路交通の高度化の 波に乗ろう

いま官民・ITS構想として進められ、ITS(Intelligent Transport Systems: 高度道路交通システム)とは、道路交通の安全性、輸送効率、快適性の向上等を目的に、最先端の情報通信技術等を用いて、人と道路と車両とを一体のシステムとして構築する新しい道路交通システムの総称です。近年の情報通信技術(ITS)の発展とデータ利活用の進展を背景に、特に自動運転システムの開発が進んでいます。いま世界中で実用化・普及に向けた競争が激化しています。日本でも官民・ITS構想・ロードマップ二〇一八において、二〇二〇年までに実証実験・法整備等を行い、二〇二一年から二〇二五年には「限定地域での自動運転移動サービスと配送サービス」を開始するというロードマップを発表しています。二〇一七年度には全国十三カ所の実証実験を実施しており、二〇二〇年以降、実証実験を実施していない地域での展開・導入支援等を実現すべきとしています。このチャンスをとらえ、自動運転の実証実験に伊豆高原が名乗りを上げてはどうかと考えます。

〈2025年完全自動運転を見据えた市場化・サービス実現のシナリオ〉



県の伊豆半島 交通網整備計画に 参画しよう

静岡県は、二〇一六年三月に南伊豆・西伊豆地域公共交通網形成計画を策定し、二〇一八年三月には東伊豆・中伊豆地域公共交通網形成計画を定めて、伊豆半島全域の交通網整備を進めていくこととしています。いずれも計画期間は五年で、鉄道、バス、タクシー、そして交通空白地域対策などの課題を解決していくとしています。私たちはこれまで利便性の問題として問題提起を行ってきたいますが、こうした計画に住民の声を反映させていくチャンスとしてとらえ、計画の実施過程に参画していくことも必要ではないかと思えます。

南大室台 一次・三五

高橋 巨



親和会地区だより

第1地区

副会長 高橋 修

第一地区は大室山の南麓に広がる親和会の中で最も標高の高い地区です。冬季は国道一三五号線周辺が冷たい雨の時でも第一地区では雪になり、車の屋根に雪を残したまま買物に降りると雪などどこにも無い、というようなことも珍しくありません。また周囲の山から吹き下ろす風も第一地区の特徴と言えるでしょう。

毎年行われる大室山の山焼きでは夜になると冷気と共に、萱の焦げた懐かしい匂いが辺りへ降りてきます。風に乗った煤が飛んでくるのは比較的広範囲にみられるそうですが、あの春を呼ぶ風情ある香りは山に近い第一地区特有のものかも知れません。



第2地区

会長 大石 孝裕

第二地区は、定住世帯数三〇七軒、定住者数六〇三名、を有する親和会四地区の中で最大の地区です。この地区の最大の特徴は何と言っても、地区内を伊豆高原駅から大室山方面に三キロにわたって延びる桜並木の景観でしょう。三月初めから中旬にかけての「大寒桜」とその後続く「染井吉野」の桜のトンネルは、まさに伊豆高原の春の象徴です。このたび、地域の住民と観光客の方々に、ゆったりと散策していただけるように、桜並木通りにベンチを四か所設置しました。多くの人にこの素晴らしい伊豆高原の風景を楽しんでいただきたいと思います。



第3地区

第十九次 二一七 山崎 栄治

「住みやすい街を創りましょう」

春の息吹を感じる季節となりましたが、地球の温暖化防止が叫ばれている中で、庭の草木もこれから一段と成長します。敷地内から車道や歩道に覆いかぶさる草木は、自動車の通行に支障の恐れがあり、その結果歩行者にも危険を及ぼします。

別荘で使用されているお宅や空き地などから伸び放題の草木も見られます。このような場合は、親和会事務所から所有者へ枝切りなどの要請を行うことも可能ですが、居宅の周辺では各々が剪定など手入れをしていただき、環境整備を行って下さい。

安全な通行に支障する箇所では、事故が起きる前に対処が必要です。住民相互に清潔な環境整備に努めて頂き、「住んで良かった伊豆高原」の街並みを作りましょう！



第4地区

会長 丹羽 忠昭

近助・共助で地域防災

十二月の地域防災訓練日、第四地区の参加者は四十六名、ここ数年同様な参加者数で推移しています。そのうち二年連続で参加された方は二十六名で、定住者の約二割の方が参加されています。全国的には近年多くの災害が発生していますが、伊豆地方ではしばらく大きな被害のある災害は発生していません。しかし伊東沖海底噴火から三十二年、大島、三宅島、箱根と近隣では、周期的に活発な活動が続いています。

ここ伊豆高原地域は十年前まで、伊豆東部群発地震で数十年にわたり揺れ続けていたのです。このような地域で暮らす私たちにとって、災害への備えは欠かすことができません。「災害は忘れたころにやってくる」このことを肝に命じましょう！



親和会部会報告

総務部会から

役員会報告

(平成三十年七月～十二月までの主な事項)

◎審議事項

- カーブミラーと街路灯の新設
- 伊東市と連携しての空き家対策の取り組み
- 桜並木通りへのベンチの設置
- 市への要望事項について
- ヤスデの駆除と蔓延防止策
- 期中の理事の交代

◎報告事項

- 各地区連絡会内容
- 各部会活動報告
- 自主防災活動内容
- 親和会会費納入状況及び月次収支報告

●事務局活動報告

平成31年度 親和会総会のご案内

本年度の親和会総会開催は次の通りです。

多くの会員の皆様のご出席をお待ちしております。

日時 平成31年5月25日(土)

午後1時30分より

場所 八幡野コミュニティセンター

3階会議室

◎会費納入のお願い

親和会会員各位には、毎年会費納入にご協力頂き厚く御礼申し上げます。

ご存知の通り、親和会は会員皆様の会費により全て運営され、当地区内の道路及び側溝の補修、浸透地の維持管理、街路灯整備、ごみ処分等、より良い住環境を整備するために使用されております。

ほとんどの会員の方は期日迄に納入頂いておりますが、一部の会員におかれましては、何らかの事情により期日迄に入金頂いておりません。

親和会規約にありますように、会員の義務として、また会員の公平性を期するためにも、会費納入へのご協力をお願いいたします。



大室山とラベンダー

道路部会から

親和会が管理している別荘分譲地内の道路ですが、通行車両の増加に伴い、道路の傷みが目立つようになりました。親和会関係者以外の車両の通行が増えてきている現状を考えれば、道路を伊東市に移管していくことが望ましいと考えます。しかし、

移管においては、関係する会員の同意書の取り付けや移管道路を確定させるための測量が必要であり、経費と手間は膨大になることが想定されます。

基本的には市に道路を移管していく方向で検討を進めつつ、一方で親和会区域内での生活道路としての通

環境美化部会から

環境美化部会に所属する環境ボランティア会(登録会員三十一名)は美しい海と山に代表される伊豆高原の自然を守るため、会則に基づいて地域内の区域を自主的に保全活動をしているグループです。

「自分たちが住む場所は自分たちの手できれいにしよう」と毎月二十五日に活動しています。一月に行いました「城ヶ崎海岸駅～門脇灯台駐車場までのゴミ拾い、草取り」では、会員以外に第四地区の有志の人たち

行車両制限を設けるなどして、当面はこれまで通り親和会の管理道路として維持していかざるを得ないと考えますが、その維持費用は会員の会費に依拠しています。

平成三十年度には道路予算を千八百万円に増額しましたが、総延長が六十五kmにも及ぶ親和会管理道路の補修は容易ではありません。今後簡易補修を丹念に行うことで道路の傷みを最小限に抑制しつつ、会員のご希望に少しでも添えるように、痛みの激しい箇所から補修していきます。また、側溝の傷みも放置できない状況になっていきますので、予算の範囲内で対処していきます。



も第四地区会長を始め数名の方々も積極的に参加されていました。

地域防災訓練実施報告

近年、日本各地で想定を超える災害が発生しており、日頃からの防災意識を高めて、いざという時のために備えておくことが大切です。

伊東市では、十二月二日に市内全域で地域防災訓練を一齐に実施、親和会も第一、第四地区でそれぞれ独自に参加しました。今年のスローガンは「たすけあい 知恵と力と おもいやり」、自助と共助を主体的に実践する訓練でした。

親和会では、各家庭でシェイクアウト訓練を実施するとともに、共助の時にシグナルとなるOK旗を掲出（掲出率52.6%）、また各地区防災倉庫前で実施した訓練には百十八名の会員が参加し、防災倉庫の資材の点検や地震発生時の行動確認、小型消火器による消火訓練などを行い、まずは自分の安全確保が大切ということを確認しました。



INFORMATION

年末餅つき大会開催

十二月八日（土）、

天候にも恵まれ、親和会年末恒例の餅つき大会を、親和会事務所前広場で開催しました。今年も三十五kgのもち米を、三つの臼を使ってつきあげました。今年は、ベテランに加え、若い人や子供達も参加して、餅つきを楽しみました。

来賓として小野市長、中田県議をはじめ、稲葉市議や八幡野区の佐藤区長、池区の稲葉区長さんにご来場賜りました。

女性スタッフの手作りのあんころ餅、きな粉餅、からみ餅に加え、例年好評の豚汁とお汁粉も提供し、来場された方々に大好評でした。参加された会員の方々に加え、来賓、スタッフを含めて二百三十名余の参加者で大いに盛り上がりました。来年も会員の皆様が楽しく交流できる場としての餅つき大会を目指して、役員・スタッフ一同頑張っていきます。



各地区連絡会開催のお知らせ

第一地区、第四地区の連絡会を左記の日程で開催いたしますので、会員の皆様方のご出席をお願い致します。各地区の諸問題についての活発な意見交換を期待しております。

第一地区連絡会

平成三十一年七月二十七日（土）

午前十時 親和会事務所会議室

第二地区連絡会

平成三十一年七月二十七日（土）

午後一時三〇分 親和会事務所会議室

第三地区連絡会

平成三十一年七月二十七日（土）

午前十時 城ヶ崎「憩いの家」

第四地区連絡会

平成三十一年七月二十七日（土）

午後一時 城ヶ崎「憩いの家」

編集後記

今年は暖冬とのこと、伊豆高原駅周辺の大寒桜も三月の声を聞くとともにほぼ見頃、一週間は早く桜の季節を迎えている。伊豆高原のソメイヨシノはこの会報が皆さんに届く頃には散ってしまっているのではと気がかりだ。しかし伊豆の見どころは桜のあとに続く新緑の季節、山が萌えるさまは伊豆でしか味わえない。

（広報部会）編集委員

市原 輝夫 高橋 洋二 徳本 政幸

吉留 道裕 (50音順)

事務局 赤堀 益雄 井端 健